

秋田県・田沢湖

玉川温泉

奇跡は2度起きた

湯治日記



「あなたは
大丈夫」

たつこ姫

ガンの治療で
はじまった
“第二の人生”の記録

秋田県・田沢湖

玉川温泉



奇跡は2度起きた

たつこ姫

湯治日記

玉川の

湯けむり浴びし

岩盤浴

水芭蕉

はじめに

本書を手を取っていただき、ありがとうございます。

何らかの縁があったからこそ、手を取っていただいたと思います。

本書は、

「余命宣告をされた」

「自然療法に興味がある」

「最後の切り札を探している」

というような方のために、玉川温泉を紹介したいと思い執筆しました。

ここで少し私の自己紹介をさせていただきます。

わたしは乳がんになったことがきっかけで玉川温泉に行くようになり、全

摘手術の予定がたった1回の湯治で温存療法に医師が自ら切り替えるほどにがんが縮小しました。

それだけでも不思議な出来事でしたが、その後も半年に1回のペースで玉川温泉に通ううちに、たくさんの不思議な出来事を体験しました。

その不思議な出来事を通じて得られたのは、元気に動ける体だけではありません。

全国に同じように病氣と闘い、元気になった仲間ができたことです。

玉川温泉を通じて、私の人生は以前よりも何倍も豊かになりました。

がんにならなければ出会わなかったであろう仲間たちとの不思議な出会いは、今振り返ればすべて必然的に巡り合ったことのように思えます。

わたしのペンネームである「たつこ姫」も、玉川温泉が運んでくれた出会いの1つです。

たつこ姫とは、秋田県にある田沢湖の女神様。

永遠の若さと美貌を願って霊泉を飲み、龍の姿になったという伝説の美少女です。

私が小学生の頃、森永製菓チョコボールの「おもちゃのカンヅメ」がブームになっていました。

当時の私も、くちばしを集めて応募。

その後送られてきたおもちゃのカンヅメの中に、「たつこ姫」のキーホルダーが入っていました。

金色の円柱の入れ物に入った、たつこ姫の像。

美しく輝くそれを見ながら

「たつこ姫の像って何処にあるのだろう。いつか行くことあるのかな？」

と、子どもながらも憧れを胸に抱いていました。

そんなことをすっかり忘れて大人になりましたが、友達が運転する車で玉川温泉に向かう道中に、休憩で立ち寄った田沢湖で再会したのです。

湖の中にある像を見た瞬間、

「これは見たことがある。大好きだったたつこ姫だ」

と幼いころの記憶が一瞬でよみがえりました。

玉川温泉が、幼いころの宝物だったたつこ姫と再会させてくれたのです。

この本を読まれた方も、私と同じような体験をされるかもしれませんが、大きな出会いという宝が得られるかもしれません。

どうか1人でも多くのガン患者の方に、延命という新たな時間を得て、また新たな仲間を得て、喜びの多い第二の人生を送ってほしい。

このような想いで、本書を出版することとしました。

第1章では、私のガン闘病記を書いています。

第2章では、私の義母を玉川温泉に連れて行った話を紹介します。

第3章では、玉川温泉での注意点やわたしなりの入浴方法を紹介します。

第4章では、玉川温泉を通じて知り合った方々とのエピソードを書きました。

闘病についてお読みになりたい方は第1章からお読みください。

玉川温泉についてすぐに知りたい方は第3章からお読みいただいても大丈夫です。

第4章を読んでいただくと、玉川温泉の魅力がその治癒効果だけでなく、人との出会いにもあることを感じていただけるかと思います。

本書があなたの人生を豊かなものにする1つのきっかけになれば幸いです。

目次

はじめに	3
プロローグ	15

第1章 わたしのガン闘病記

2014年12月16日	乳がん検査	23
2014年12月17日	入院1日目	27
2014年12月18日	入院2日目	29
2014年12月19日	入院3日目	32
2015年1月22日	抗がん剤治療	35
2015年5月14日	抗がん剤治療終了	40

2015年5月25日	玉川温泉1日目	……	42
2015年5月26日	玉川温泉2日目	……	44
2015年5月27日	玉川温泉3日目	……	46
2015年6月3日	病院の検査	……	47
2015年6月6日	検査結果	……	50
2015年6月9日	手術	……	53
2015年8月3日	白昼夢を見た話	……	55
2015年8月4日	放射線治療開始	……	59
その後の経過	……		61

第2章 義母のガン闘病記

義母を玉川温泉に連れていこうと思いつ

…… 68

アクセスをよく調べたほうがいい

…… 73

世界で2つしかない温泉

…… 76

義母にも驚きの結果があらわれた

…… 79

玉川温泉の温泉水は家でも大活躍

…… 83

2度目の玉川温泉で奇跡が起きた

…… 86

がん発症後、7年後に永眠

…… 89

第3章 玉川温泉ガイド

行き方も入り方も失敗したーさん

…… 91

基本の入り方	……	94
空腹時に入ってはいけない	……	96
岩盤浴と飲用による湯治	……	98
湯治の時間は、自分と向き合う時間	……	101
子どもを連れていくには向いていない	……	103
普通の温泉のつもりで入ってはいけない	……	106
常連客は「自炊部」に宿泊する人が多い	……	107
岩盤浴をしながら蒸し野菜が作れる	……	109
糖尿病の人は、血糖値が安定する	……	113
何回も通い、神社にお参りすると良い	……	115
ガン友が自然とできる	……	117
体力が回復する効果もある	……	119

第4章 玉川温泉つながりのご縁

岡山のWさん（71歳・女性）	……	123
松江市のHさん（舌癌から転移ステージⅣ）	……	129
ゼロ磁場での体験	……	135
Nさん（69歳・女性）	……	140
高野山への感謝参り	……	147
東京のAさん（71歳・男性）	……	150
青森県のDさん（63歳・女性）	……	154
Bさん（玉川温泉の名物ナース）	……	170
玉川温泉で足をねん挫した話	……	173
肩を骨折した話	……	175

杉浦貴之さん（講演家・雑誌メッセンジャー編集長）
……
179

友人A（40代・男性）
……
189

てんつくマン（路上詩人・映画監督）
……
197

おわりに
……
205

プロローグ

私が20歳そこそこの頃のことです。

京都の映画村を観光で訪れたときに、年老いた占い師に出会いました。

もう80歳ぐらいの方で、白くて長いあごひげがあり、なぜか神職を彷彿とさせる恰好をしています。

上は白の狩衣^{かりぎぬ}、下は水色の袴といった出で立ちです。

近くの壁には、有名人との写真がたくさんかざってありました。

中には初代水戸黄門の東野英治郎さんとの写真も飾ってありました。
とうのえいじろう

「この占い師は、すごい人なのかもしれない……」

興味があったので、思い切って私は占ってもらうことにしました。

「占ってもらえますか」

と占い師の前に用意してある古い椅子に腰かけたところ、一瞬ですが占い師の目が、まるで猫の目にな変わったように見えました。

眼球が銀色に光り、瞳孔が細長く見えたような気がしたのです。

見間違いだと思いました。不思議な感覚を覚えたことは確かです。

問診票のようなものに生年月日と名前を書き込み、占い師に渡しました。

占い師は私の手を取り、手相を見ると同時に、傍らにある水晶玉に触れ、それを動かしながら、いよいよ占いの結果を言おうと口を開いたその瞬間のことです。

突然、風がふいて近くに生えている笹の小枝を揺らしました。

「サワサワサワ……」

まるでこれから何かが起こる前兆のような雰囲気の中で、彼の穏やかな声が、心地よく耳に響いたことを覚えています。

「将来、あなたは免許をもつような仕事につくだろう」

「今後、寝不足になる時期がやってくる」

当時の私にはなんのことやらさっぱりでしたが、この数年後、私は看護師になることになりました。

次に言われたことは、

「生命線が途中で切れているが、運命線がカバーしている」という衝撃的なものでした。

カバーしているということは、助かるのだろうと私は深くは考えませんでした。

今振り返れば、占ってもらってから数年後に死んでいたかもしれない経験
を確かにしていました。

しかし不思議なことに、その時は助かったのです。

最後に占い師は、水晶玉を覗きながら、

「えっ」

と口にしました。

なんだろうと私は思い、次の言葉を待ちました。

「大病を経験するが……あなたは死なない。大丈夫、大丈夫」

占い師の方は、この言葉のときだけとても深刻な表情に変わりました。これは、私がガンになり、玉川温泉に行くことを予言していたのかもしれない。

占い師は同時に

「あなたには、信仰心が欠けている」と伝えました。

確かに私の実家には仏壇もなく、拝む習慣がありませんでした。

その後、玉川温泉に通うようになってから、ずいぶんと手を合わせることも多くなりました。

また、玉川温泉で出会った仲間たちと神仏めぐりをするようになりました。

今振り返ると、この時の占い師の言葉はすべて当たっている気がします。怖くなった私は、

「私はいつ死ぬんですか？」

と聞いたところ、

「まあまあ生きる」

と言われ、安心した記憶があります。

このときの占い師の言葉が、その後の人生の中で力をくれたと思います。

第1章

わたしのガン闘病記

出雲から

大きな鳥で

八幡へ

病に打ち勝つ

たつこ姫

水芭蕉

2014年12月16日 乳がん検査

生理前になると乳房が張り、生理が終わると自然にひいていく。

それがわたしのいつものサイクルでした。

ところがこの頃、数カ月間にわたって生理がなくなっていました。

左乳房だけが張りっぱなしの状態で、なんとなく気になっていました。

同僚の看護師にこの話をしたところ、

「一度見てもらったら」

と促され、この日、思い切って乳腺外科の外来に受診しました。

そこでドクターから聞いた言葉は

「明日にでも仕事を休職してまず検査しましょう」

とのこと。

この辺から、不安が徐々に大きくなっていきました。

「細胞診」というがん検診の結果は、悪性腫瘍。

しかもステージⅢCでした。

がんは進行度に応じて、ステージ0～ステージⅣまでの5段階に分類されます。

ステージⅢは、がん腫瘍が皮膚の下の筋肉層の奥にあるリンパ節にまで浸潤しており、リンパ節への転移もある状態です。

リンパ節転移の数によって、ステージⅢはさらにABCの三分類に分かれます。

わたしはステージⅢCですから、リンパ節転移が3個以上確認されている状態ということでした。

つまり、手術で治せるギリギリの段階までがんが進行してしまっていたのです。

「明日にでも入院して抗癌剤の投与をしましょう」
ドクターの口ぶりからも、緊急性を感じました。

「あなたの場合、すでに胸骨傍リンパまで転移しています。もうすでに全身にがんがまわっているかもしれません。全身への抗癌剤が終了したら、手術をしましょう。それから放射線治療です。標準治療すべてやりましょう」という厳しいコメントでした。

「えっ抗がん剤が先ですか？ 先に手術ではないのですか？」

「あなたの場合、そんな悠長なこととは言っていないかもしれません。先に全身をめぐるっているがんをやっつけないと」

こうして、わたしは翌日の2014年12月17日から入院することになりました。

試し読み版はここまでです。
この続きは製品版でお楽しみください。

